

## ◆ 文京都税事務所長賞 ◆

「必要な医療を受けられるありがたさ」

広尾学園小石川中学校 1年 萩野 遥陽

夏がくると毎年思い出すことがある。

二歳で喘息と診断されてから気圧の変化に影響され、台風の前後にはかなりの高頻度で夜に発作を起こし度々救急外来のお世話になってきた。横になると咳が止まらず、病院で血中酸素濃度を確認しながら処置を受け、母の心配そうな顔を横目に朝を迎える幼少期だった。日々の予防治療と水泳が功をそうして中学校入学前にはそうした生活を卒業できた。若干の不安は残るものの、今では救急外来のお世話になることもなくなり、適切な治療を長年継続して受けてこられたことに本当に感謝している。

もう一つは、八月一日に亡くなった祖父のことだ。私が生まれる少し前に亡くなり、夏が来るとよく生前の話を母が聞かせてくれる。祖父は若いころから腎臓が弱く、母が今の私と同じくらいの年の頃に慢性腎不全となった。それから二十年以上週二回人工透析を受けながらも不自由な思いを家族にさせないように養ってくれた、とても家族思いな人だったそうだ。人工透析は機能しなくなった腎臓の代わりに、一度に四時間ほどかけて血液を機械でろ過して体内に戻すという祖父が生きていくのに必要な治療だった。また、当時受けていた人工透析などの治療は、健康保険や医療助成金の利用ができないと月額五十万以上もするものだったらしい。本来はかなり高額な治療だが、健康保険と医療助成金制度もなく、費用を捻出できず治療を受けないという選択をして亡くなった方や、家族に経済的な負担をかけたくないと離婚したケースも少なくなかったらしい。治療を受けなかったり、頻度を下げ続けると死につながってしまうが、継続して高額治療費を払い続けることができる人が極わずかなのも現実だと思う。

もし、そんな時代に生まれていたら、喘息治療をはじめ必要な医療を十分に受けてこられただろうかと考えてしまった。現在東京都では高校生までは医療助成金が受けられ、健康保険と併用し自己負担金ゼロで医療が受けられる。医療助成金の財源は税金だ。

本当に治療を必要としている人が費用の心配もなく治療を受けられるように税金が使われ、生きられる人が増えるのは素晴らしい制度だと思う。税金の投入がなければ、自分は生まれてなかったかもしれないし、この健康はなかったかもしれない。

一方で自己負担金がゼロだからと安易に病院へ行き薬の処方を過剰に受けるのは本末転倒だ。税金と使われ方のバランスを崩せば、必要な治療を我慢せざるを得ない時代に逆走しかねない。感謝の気持ちを持って、各自が健康に気を付けるのはとても大切なことだと思う。